

青梅市文化財ニュース

第402号

令和3年4月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館(青梅市駒木町 1-684 TEL0428-23-6859)

御岳山「富士峰之花」歌碑

御岳登山鉄道の御岳山駅を降りると御岳平が広がります。東方には視界が開け、関東平野を望むことができます。反対に西方には山の斜面を昇降する観光リフトの架線が伸びています。地形図を見れば、御岳山(929m)から大塚山(920m)へと続く稜線の途中に標高883mの単独の小さな山があるのが分かります。この周辺は富士峰^{ふじみね}と呼ばれ、周囲一帯は富士峰園地として東京都が管理する自然公園になっています。山頂部分には武蔵御嶽神社の摂社である「産安社」^{うぶやすしゃ}が鎮座していますが、江戸時代はこの社は富士浅間社と呼ばれていました。御岳山から富士山を見ることはできませんが、昔の人はこの峰に富士の姿を重ねていました。(注①)

この産安社の西方約50mの所に歌碑があります。歌碑は高さ15cmの台座に乗り、石碑部分は高さ160cm、幅75cm、長方形がやや波打つ形状です。題額部分は高さ34cm、幅65cmあります。表面には下記のように刻まれています。

(題額) 富士峰之花 従一位建通

(和歌) 御嶽山八景の内 千本さくらの題をよめる 正二位教忠

道もせに 咲つづきたる さくらばな
かおりにむせぶ 春の山ぶみ

裏面には明治23(1890)年5月との建立年月と、建立者の氏名が4段にわたり刻まれています。残念ながら欠損があり一部の人の氏名が不明ですが、約60人の名前があります。御岳山住民が3分の2を占めますが、残り3分の1には御嶽、沢井、二俣尾など近隣住民のほか、青梅、小丹波に住む人の名も見えます。

題額を揮毫したのは久我^{こが}建通です。久我家は村上源氏の勅流にあたり、碑にある印章にも源の字が見えます。建通は、文化12(1815)年2月1日生まれ、実父は関白一条忠良で、後に久我家を嗣ぎます。幕末動乱期には公武合体派に身を置き内大臣の要職に就



きますが、後に尊王攘夷派の弾劾を受けて失脚します。孝明天皇の百ヶ日御聖忌の大赦により赦免され、明治時代には賀茂別雷神社・賀茂御祖神社大宮司、松尾神社宮司、貴船神社宮司を任ぜられ、宮内省御用掛、文学御用掛、皇典講究所副総裁を務めました。明治 36（1903）年 9 月 28 日に亡くなっています。（注②）

和歌を詠んだのは藤波教忠ふじなみのりただです。文政 7（1824）年閏 8 月 19 日～明治 24（1891）年 1 月 31 日。教忠の藤波家は堂上公家の一家で、本姓は「大中臣」おおなかとみです。古事記・日本書紀神話の天岩戸の段で、天照大神の祭祀奉仕者として活躍した天児屋命あめのこやねのみことが始祖と伝えられます。平安時代から大中臣氏は、伊勢の神宮を統括するために神祇官におかれた官職である祭主を世襲するようになり、神事奉仕の氏族として不動の地位を確立していきました。しかし、明治維新の諸制度の改革は、古代以来の家職である神祇官の役職と祭主職を藤波家から解きます。この変革期に当主であったのが、第 42 代となるこの教忠でした。

この大中臣氏は、高名な歌人も多く輩出しています。第 12 代頼基、第 13 代能宣はそれぞれ三十六歌仙に数えられます。教忠には、『大八洲歌集』や、『類題新年作例集』などの歌集に採録があり、堂上歌人としての活動があり、伝統的な和歌の教育と詠法を身に付けていたようです。（注③）

『武蔵國御嶽山八景和歌』（明治 21 年）という印刷物の中で、数名の学者と十数名の御岳山の御師が御岳山上の名所・珍鳥などを題として和歌を詠んでいます。この藤波教忠の和歌は四十二首中の最初に掲載されています。『武州御岳山』（明治 45 年）に「富士峰は、櫻花の名所なり」、『御嶽菅笠』（天保 5 年）に「馬手なる山は富士峰の、千本の櫻咲乱れ、花のふぶきは春ながら、雪か雲かとあやまたれ」とあるように、富士峰は桜の名所でありました。現在は数本が残りますが、かつては香にむせるほどの、散る花びらが雪と間違われるほどの桜が咲き、この場所を彩っていたことでしょう。

花といえば桜。昔より春に一斉に咲く桜を日本人は愛してきました。美しさはもとより、冬の寒さや氷雪を乗り越えて咲く花の姿に、生命力の力強さを感じてきました。この桜を咲かせる生命力に「木花開耶比咩命」このはなさくやひめのみことの力を感じ、人々は全国各地にこの女神をおまつりしてきました。御岳山にもこの「富士峰之花」の歌碑の近く、産安社に三柱の女神の一柱としてまつられています。武蔵御嶽神社では産安社の祭礼日を「四月櫻花日」としてきました。この富士峰の地において桜の美しく咲く日に合わせて、毎年祭礼日を決めています。本年（令和 3 年）は明日（令和 3 年 4 月 16 日）、祭典が行われます。

注①「産安社」青梅市文化財ニュース 350 号（平成 28 年 12 月 15 日発行）

注②「皇典講究所草創期の人びと」（昭和 57 年）

注③「大中臣祭主藤波家の歴史」（平成 5 年）